

アイヌ英雄叙事詩における結末

― 同一ストーリーにおける揺れを中心に ―

遠藤 志保

一. はじめに

アイヌ英雄叙事詩（以下、ユカラ⁽¹⁾）は、主人公と敵対者との戦いを中心に展開する韻文の物語である。山城で大切に育てられていた主人公の少年英雄が、次々に現れる敵対者と戦い、勝利していくというのが典型的な流れである。そして戦いがすべて片づく、主人公が再び山城に戻って平穏な生活を送るといふところで大団円となる。

本稿では、このように平穏な暮らしを送ったと語られる大団円、すなわちすべての戦いを終えた後に語られる部分を「結末」と呼び、ユカラの結末においては何が語られるのかを見ていく。特に同一のストーリーで二種類のテキストが遺されている物語に着目し、それらの異同から論じる。

二. 使用テキスト

主なテキストとして用いるのは、沙流郡門別町（現・日高町）富川に住んでいた鍋沢元蔵（モトアンレク）氏（一八八六～一九六七）の筆録によるユカラである。具体的には、門別町郷

土史研究会（一九六五、一九六九）所収の各ユカラ、国立民族学博物館所蔵鍋沢元蔵筆録ノートに所収の各ユカラ（「ニタイパカイエ（二十九年版）」、「ポイソヤウンマツ」⁽²⁾、「三兄弟」）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター所蔵鍋沢元蔵筆録ノート所収のユカラ（「イモンカオヤンマツ（三十三年版）」）である。

三. ユカラにおける結末のパターン

鍋沢氏のユカラにおいて語られる結末には、大きく分けて二つのパターンが見られる。

ひとつは、主人公の山城などで「いつものように暮らしている」という平穏な暮らしを送る様子が語られる場合である。た

たとえば、「水なしに育つ、火なしに育つ」というユカラでは、山城に戻ってきた主人公を「わが妹が／歓迎して／くれたのである」と妹（ここでは妻の意）が迎えてくれた後、「それから／変りなく／暮っていたこと／我物語った」「門別町郷土史研究会 一九六九 五六〇」のように語られる。このほかに、仲間たちを呼んで酒宴を行うなど、その様子を具体的に描写するテキストもある。

一連の戦いが完全に終了したことは、こうした「山城での平穏な暮らし」を語ることによって表される。ユカラの主人公は必ず勝利するため、悲劇的な結末は存在しない。戦いが終結した際に語られるのは、必ずこのような幸福な大団円である。

このパターンにあたるテキストとしては、「犬育て、悪者育て」、「ニタイバカイエ」（二十九年版、四十年版）、「喰べ気遣い」、「イモンカオヤンマツ」（三十三年版、四十年版）、「水なしに育つ、火なしに育つ」、「クトゥネシリカ」、「ポイソヤウンマツ」、「余市姫」の八種（十話）の物語がある。

もうひとつのパターンは、戦いが完全には終結しないという結末で、「魔竜退治」、「三兄弟」、「鷲鎧」の三つのテキストが該当する。

この場合は、「次の戦いへ向かう」あるいは「いつものように暮らしているのだが、自分のことを悪く噂しているものがあるらしい」と語られることによって、なお新たな敵がいることが示唆される。たとえば、「魔竜退治」の結末では、「今はじめ

て／戦争の間を／体を休ませて／われしては／何の変りなしに／暮っていた」、「神の娘を／われ自身の妻に／してしまつて／暮していた」と、戦いを終えて妻とともに平穏に暮らしていると語られるが、それに続いて「風の便りの／まわり来た話を／聞いたら／悪い外国人が／妬んでいる／という話を／聞きながら／暮していたこと／われ物語った」「門別町郷土史研究会 一九六九 三六七―三六八」と、新たな敵対者・火種を予想させるような表現で物語が終わる。

ウンベルト・エーコ（一九八四、一九九三）による「開かれた作品」「開かれたテキスト」という概念を受けて、「開かれた――」「閉じられた――」という概念が文学研究において論じられるようになったが、その流れとして作品の終結についても「開かれた結末」と「閉じられた結末」という概念・発想による議論が展開された（仁平 二〇一〇）。「開かれた」結末とは「はつきりとした解決なしに終わり、結末について多様な解釈が可能である場合」で、逆に「はつきりとした解決に至つて終結する方法」は「閉じられた」結末である（廣野 二〇〇五 一〇九―一〇頁）。

以下、本稿ではこの語を用いて、戦いが完全に終結したという「はつきりとした解決」が語られているタイプを「閉じられた」結末と呼び、それに対して次への戦いが示唆されることによって物語がしつかりと閉じていないタイプを「開かれた」結末と呼ぶことにする。

	「閉じられた」結末 =平穏に暮らす（幸福な結末）	「開かれた」結末 =次の戦いを示唆
山城での生活を語る	「いつものように暮らす」。 〔「犬育て、悪者育て」〕、「ニタイバカイエ」 （29年版、40年版）、「喰べ気違い」〔「イモ ンカオヤンマッ」〕（33年版、40年版）、「水 なしに育つ、火なしに育つ」	「いつものように暮らす」が、敵対 者の存在が示唆される。 〔「三人兄弟」〕、「魔竜退治」
山城での生活 の省略	山城に戻る途中。 〔「クトゥネシリカ」〕「ボイソヤウンマッ」、 「余市姫」	次の戦いに向かう。 〔「鷲鎧」〕

表1 鍋沢元蔵氏のユカラの結末

鍋沢氏のユカラにおいて、戦いが完全に終結して、山城で平穏に暮らした様子を語る「閉じられた」結末が多くみられる。また、「開かれた」結末においても、新たな敵や戦いの存在が示唆されるのは、平穏の暮らしが語られる中においてであることから、やはり「山城での平穏な暮らし」を語ることが、ユカラにおける典型的な結末の語り方だと言える。

しかし、常に「山城での平穏な暮らし」が語られるというわけでもない。たとえば、「余市姫」では結婚相手とともに「シヌタブカへ／赴くために／神風の先端に／飛び上って／行ったのであ

る」〔門別町郷土史研究会 一九六九 四〇四〕と山城に向かう途中で物語が終わってしまう。次なる敵はまったく示唆されないため、「閉じられた」結末に分類することはできるが、山城での平穏な生活そのものは語られない。

「開かれた」結末も同様に、必ずしも山城において次の戦いが示唆されるという終わり方のみではなく、山城での生活が省略される場合もある。この場合は、「鷲鎧」における「アトイヤ姫の／悪魔女の／あとを追いかけて／行ったこと／天空を／飛んで／われ行ったこと／物語った」〔門別町郷土史研究会 一九六九 二五七―二五八〕という結末のように、山城に向かわずに、次の戦いに向かおうとしている（向かおうと考えている）という表現で幕切れとなる。

このように「山城での暮らし」が語られずに省略されるタイプを含めて、鍋沢氏のユカラにおける結末のパターンを一覧にすると表一のようになる。

同じアイヌ文学でも、散文説話においては大団円にあたる「物語の最後のところをはしよってはいけない」とされ、「村に帰ってから主人公が結婚したのか、神様を祀ったのか、子供ができたのか、年を取って死んだのか、それぞれの話ごとの結末は飛ばさずに語らなければならない」〔奥田 二〇一〇 三六四〕という。このように散文説話においては、何らかの事件が無事に解決したところで物語が終わりになるのではなく、主人公が子供に恵まれ、年を取るまで長生きして一生を終える

ところまでを丹念に語る。

一方、ユカラでは、物語の最後は大団円であるという点では散文説話と共通しているものの、主人公が一生をどのように過ごしたかというところまでは語られない。「閉じられた」結末においてさえ、戦いが済んで「いつものように暮らした」と語られるのみである。その後の様子を語る場合があるとしても、「仲間を呼んで酒宴を行った」のように、ごく短い期間の出来事を語るにとどまっている。

散文説話と比べると、ユカラの結末はいたって簡潔である。その上、前述のように「山城での平穏な暮らし」の様子を省略することさえあり、結末の扱いは軽いように思える。この差は、散文説話が主人公の人生のドラマを物語るのに対して、ユカラが戦いを中心とする冒険活劇であることによるのではないだろうか。ユカラは戦いに主眼を置いている物語であるため、結末で語られるべきことは戦いの終結である。それ以後の主人公の人生がどのようなものかは、冒険物語であるユカラにとつては、埒外の内容になるのである。

したがって、ユカラの結末で典型的に語られるのは、戦いが終了して大団円に至ったという点のみだと言える。一方で、どのような「平穏な暮らし」を送ったのかを語ることは必須ではない。しばしば簡潔な描写で終わった、「平穏な暮らし」の様子が省略されたりする理由としては、このようなユカラにおける結末の役割も関わっているのではないだろうか。

四. 同一の物語における結末の異同 (一)

— 「クトゥネシリカ」

本節以降、同一のストーリーについて複数バージョンのテキストが確認できる物語について、それぞれの結末の異同を見ていき、結末で語られる内容・表現の固定性あるいは流動性について論じる。

まず取り上げる物語は「クトゥネシリカ(虎杖丸の曲)」である。

「クトゥネシリカ」は複数の伝承者によるテキストが残されている。このうち、公刊されているテキストは、鍋沢ワカルバ(金田一(一九九三a)所収、以下「A」)、平賀ヤヤシ(北海道教育庁社会教育部文化課(一九八七—一九九二)所収、以下「B」)、鍋沢元蔵(門別町郷土史研究会(一九六五)所収、以下「C」)、金成マツ(金田一(一九九三b)所収、以下「D」)という四人の伝承者がそれぞれ語り/書き遺したテキストである。⁽³⁾ A〜Cはいずれも沙流地方のテキストで、Dのみ幌別の伝承者によるものである。また、門別町郷土史研究会(一九六五)によると、Cの伝承者(鍋沢元蔵)はAの語り手(鍋沢ワカルバ)ならびにBの語り手(平賀ヤヤシ)からユカラを習ったという伝承関係にあったという。

以上の四つのテキストにおける結末は、それぞれ表二のよう

テキスト	パターン	内容
A (鍋沢ワカルバ)	開かれた結末 (省略)	敵の村の近くにいるのに、ここで帰ることはできないと考える。
B (平賀ヤヤシ)	閉じられた結末	育ての兄・姉ならびに獲得した妻たちと共に、山城で平穩に暮らす。
C (鍋沢元蔵)	閉じられた結末 (省略)	自分の山城の近くに降り立つ。
D (金成マツ)	閉じられた結末	育ての兄・姉ならびに獲得した妻たちと共に、山城で平穩に暮らす。

表2 「クトウネシリカ (虎杖丸の曲)」の結末

これらのストーリーに特有のものとして固定しているのではないと言える。前述のように、CはAならびにBからユカラを習ったという伝承関係にあるにもかかわらず、CはA・Bいずれの結

になつてゐる。前節で典型的な結末としてあげた「平穩な生活」を語る「閉じられた」結末は、BとDで見られる。しかし、「閉じられた」結末で「平穩な暮らし」の省略(C)、「開かれた」結末で「平穩な暮らし」の省略(A)というパターンも見られ、同じストーリーのユカラであるにもかかわらず、その結末は決して一定ではない。

したがって、ユカラの結末は、それぞれ異なる。そのために、むしろ結末はユカラを構成している各場面のなかでも特に変化が起こりやすい部分であるとさえ考えられる。

また、結末において費やされている行数を見ると、それぞれ、Aが十行、Cが五行となつてゐるのに対して、Bは二三一行、Dは二八八行となつてゐる。A・Cは「山城」での描写を省略しているため、ごく短い結末となつてゐるが、ともに「閉じられた」結末を語つてゐるBとDとのあいだでも、Dのほうが二倍以上長いという相違が見られる。この差は金成氏(D)のユカラにおける表現上の特徴が影響しているものと考えられる。

「金成マツの文章はいろいろな面において細やかですごく詳しく書かれており、他の英雄叙事詩とはちよつと違います」「本田 二〇一〇 一二三」などのように、金成氏のユカラは丁寧に「細やか」な表現であると指摘されることはしばしばある。こうした「細やか」な表現は、婚姻関係「本田 二〇一〇」のほか、服装の描写「本田 二〇〇四」や「関係者が延々と自分の心情を吐露している」「蓮池 一九九七 二七八」様子においてみられる特徴だといふ。いずれも事物・状況の描写の部分であることから、ユカラの中心的話題である戦いそのものにはかかわつてこないモチーフにおいて、「細やか」な表現が端的にみられるとまとめることができる。

そして、金成氏によるクトウネシリカ(D)の結末がほかの伝承者のテキストにおけるそれよりも長くなつてゐるのは、食

事の様子や結婚相手とどのような生活を送ったのかといった状況が「詳しく」語られているためである。ここでもまさに金成氏の語りの特徴が発揮されていると言えるだろう。

五. 同一の物語における結末の異同 (二)

—「ニタイバカイエ」

「クトゥネシリカ」は複数の伝承者によるテキストであったが、それでは同じ伝承者による同一のストーリーのバリエーションにおいては、どのような異同が見られるだろうか。

鍋沢元蔵氏が遺したユカラの中には、同一のストーリーを時を置いて筆録したというテキストもある。

そのひとつが「ニタイバカイエ」というユカラである。ひとつは昭和四十年に筆録されたテキストで、門別町郷土史研究会(一九六九)に収められている。もうひとつは国立民族学博物館蔵の鍋沢元蔵氏筆録ノートに書かれている昭和二十九年筆録テキストである(以下、それぞれ「四十年版」、「二十九年版」と記す⁽⁴⁾)。

四十年版における結末では、戦いを終えた主人公がシヌタツカの山城に戻ると、二人の実兄が主人公の無事の帰還を喜び、その後は「わが寝台／寝台の上に／われ身を投げて／臥したこ」と／われ物語った。「門別町郷土史研究会 一九六九 二〇二二」という簡潔な表現で終わっている。

それに対して二十九年版では、同じく主人公がシヌタツカの山城に戻ってきた直後、彼の妻となるヒロインが山城にやってきて、主人公たちのために炊事を行うなどの「平穏な暮らし」が語られる。さらには主人公が魔神(トウムンチカムイ)のもとで育てられていたことから、その影響を取り除くための「魔払い」が行われ、仲間たちを呼んで「酒宴」を行ったというところで物語が終わる。

その結果、四十年版の結末は二三行となっているが、二十九年版では結末に二三九行が費やされている。

同じ鍋沢氏のテキストであり、また同じ「閉じられた」結末のバターンであるにもかかわらず、結末の長さやそこで語られるモチーフに大きな相違が見られることから、語り手ごとに表上の特徴があることはまた別に、結末そのものが時と場合によって伸縮自在であると言えるだろう。

そして、ここで着目したいのは、「魔払い」のモチーフである。

「ニタイバカイエ」の冒頭で、主人公は「育ての爺」に育てられている。後に、この爺は主人公をさらって育てた魔神であることがわかり、主人公はその魔神と敵対することになる。しかし、その前に主人公は魔神の命令によって自分の実兄たちに刀を振るっている。こうして実兄らに刃向かう主人公の行為や心根を、この物語では「悪い心(ウエンケウトウム)」（二十九年版）と呼んでいる。この「悪い心」を消滅させることを目的

として行っているのが、「魔払い」である。

そのため、このストーリーにおいては、主人公が完全に魔神の影響下から抜け出るために「魔払い」が不可欠のモチーフとなっている。ただし、それぞれのテキストにおいて「魔払い」が語られる場面は異なっており、二十九年版では前半部の終了時点ならびに結末で、四十年版では前半部の終了時点で語られている。

ユカラはしばしば複数の段から成り立っており、「ニタイパカイエ」も大きく前半・後半に分かれている。前半部は前述のように、主人公を育てた魔神との戦いを中心に展開するが、後半部は恋敵との戦いが主軸となる。

前半部は、敵対者である魔神を倒すことで落着く。この魔神との戦いをめぐるストーリーが一段落したところで、主人公たちは山城に戻って「平穏な暮らし」を送るが、そのうちに主人公は「眠ろうとしても眠れずに」山城の外に飛び出し、そこから次なる展開・新たな敵との戦い（後半部）が始まる。

「魔払い」は、前半部の終了時ならびに結末で行われていたが、それは、いずれも戦いを終えた後の「山城での平穏な暮らし」という、非戦闘状態において語られているとまとめることができる。

すなわち、「魔払い」が語られる場面は、山城での非戦闘状態でありさえすれば、物語の途中かラストかは問わないということである。そのため、この場合には、結末における「平穏な

暮らし」と、物語の途中で出てくる「平穏な暮らし」とは、ほぼ同等の機能を果たしていると言える。

したがってこの「ニタイパカイエ」の単純な構造は「平穏な暮らし↓戦い（1）↓平穏な暮らし↓戦い（2）↓平穏な暮らし」という、「戦い」と「平穏な暮らし」が交互に語られるサイクルを成しているということになる。これは、「ニタイパカイエ」以外のユカラにも共通する構造で、戦いの数（段数）が多くなっても、「平穏な暮らし」と「戦い」とが交互に語られるというサイクルはまったく同じである。

見方を変えれば、これは、「平穏な暮らし」の後に「戦い」が始まるということでもあるので、「平穏な暮らし」の場面は、戦いの終了を端的に表すと同時に、次の戦いが始まる前の発端部分になっているとも言える。

大団円が典型的なパターンであるユカラの結末において、次なる戦いが示唆される「開かれた」結末が語られることがあるのも、結末における「平穏な暮らし」も物語中途に出てくる「平穏な暮らし」と同様に、次の戦いが始まる際の導入の場になりうるためではないだろうか。

したがって、アイヌの英雄叙事詩においては、「閉じられた」結末が多く見られるが、それらはすべて、これ以上話が続くことはできないという意味で、完全に「閉じられた」結末にはなっていないとも言えるだろう。物語や戦いが終了しているものの、いつでも新たなストーリーや戦いの発端につながりうる

かたちでの結末である。

そしてそれは、「平穏な暮らし」とがサイクルを描くことで構成されているユカラの物語構造と関わってくるのである。

六、同一の物語における結末の異同（三）

―「イモンカオヤンマツ」―

ここで、もう一篇、鍋沢氏による同一ストーリーのバリエーションにおける結末を比較したい。

取り上げるのは「イモンカオヤンマツ」という物語である。このうちのひとつは、門別町郷土史研究会（一九六九）に収められている、昭和四十年筆録のテキストである。もうひとつは北海道大学アイヌ・先住民研究センター所蔵の鍋沢元蔵氏筆録ノートによる昭和三十三年筆録のテキストである（以下、それぞれ「四〇年版」、「三十三年版」と記す）。

四〇年版では、主人公のイモンカオヤンマツ（トリカブト姫）がアイヌラツクルに嫁ぐというところで落ち着いた後、

- ・アイヌラツクルがこれまでの経緯を説明する。
 - ・平穏な生活（トリカブトが人間の国に広まる／主人公が自分を育ててくれた兄に自分の作った刺繍衣を送る）
- という内容が語られている。

三三年版でも、同様に主人公のイモンカオヤンマツがオキク

ルミに嫁ぐことになったのち、

- ・オキクルミがこれまでの経緯を説明する
 - ・平穏な生活（トリカブトが人間の国に広まる）
- といった事柄が語られて、物語が終わる。

「主人公の婚姻相手による経緯の説明」と「トリカブトが人間の国に広まったこと」が、両テキストで共通しており、違いは「自分の兄に刺繍衣を送る」というモチーフの有無のみである。これまでに見てきた「クトゥネシリカ」や「ニタイパカイエ」では必ずしも結末で同じモチーフが語られていなかったが、「イモンカオヤンマツ」においては二つのモチーフが一致しており、比較的差异が少ない結末になっていると言える。

また、トリカブトが人間の国に広まったという部分の表現を見ると、四十年版は、

オロワネシ	それからは
アイヌモシリ	アイヌの国
モシリソカシ	国土の上に
スルクキナ	トリカブトの草を
アエピラサ	ばら播き
キルウエネ、	したのである、
(中略)	
アイヌラツクル	アイヌラツクルの
パセカムイ	重き神に
アエヤイマクナ	わたし自ら嫁し

ホラリワ

づいて

アナンカトウ

いたこと

アオモンモモ

物語った。

〔門別町郷土史研究会 一九六九 四五一・四五三〕

となつており、三十三年版では同じ個所が、

タパンペクス

そのため

スルクノンノ

トリカブトの花が

モシリクルカ

国土の上に

エヘトウクバ

生えて

アイヌウタラ

人間たちは

エイワンケワ

(それを)使つて

ユクネヤツカ

鹿でも

カムイネヤツカ

熊でも

ロンヌカトウ

殺す様子

ネルウエネ

であるのだ。(と)

オキクルミ

オキクルミ(という)

パセカムイ

尊い神の

カムイマチヒ

立派な妻(である)

イモンカオヤンマツ

イモンカオヤンマツが

イソイタクセコロ

物語ったとさ。⁷⁾

となり、細かい表現こそ違うものの、語っている内容はほぼ同様だと言えるだろう。

それでは、なぜ「イモンカオヤンマツ」においては結末の差異が少ないのだろうか。

その理由としては、この物語が典型的なユカラのように戦いを中心としていないことが関係していると考えられる。

この物語の主人公である少女(イモンカオヤンマツ)には、神の国に住むカントリカムイという許嫁がいたが、その男にいい顔をしないでいるうちに、人間の国に住むアイヌラツクルにさらわれ、やがて彼と仲になる。主人公の兄は怒ってアイヌラツクルに文句を言いに来るが、アイヌラツクルの弁舌に納得して、償いの品をもらって帰り、主人公はアイヌラツクルと結婚した、というのが、四十年版のあらすじである。この中で、戦闘場面は一切出てこず、争いが起こりそうになっても話し合いで解決してしまう。この物語は戦闘ではなく主人公の結婚を主題としたストーリーとなつているのである。

また、主人公の結婚相手がアイヌラツクル=オキクルミという人文神であることや、最後に人間の国にトリカブト(狩猟で用いる毒矢のために必要な植物)が広がったという由来譚も語られていることから、オイナ(聖伝)という人文神を主人公とする物語群に近い筋のユカラだと言うこともできそうである。

こうした主題の違いは、物語全体の構造にもかかわってくる。典型的なユカラにおいては、物語の中心は戦いにある。前述

のように、このようなユカラにおいては「平穏な暮らし↓戦い↓平穏な暮らし↓戦い……」というサイクルによって、次々と新しい戦闘を語りつないでいくことができる。

このようなサイクルによって二段以上の構成になっているユカラの中には、前半・後半でそれぞれヒロイン（主人公の結婚相手）が異なってくる物語も少なくない。たとえば、戦いを中心とする「ポイソヤウンマツ」というユカラでは、前半はポイソヤウンマツが主人公の許嫁だと語られるにもかかわらず、後半は彼女のことは忘れさられて、魔神（トウムンチカムイ）の娘がヒロインの役割を果たす。以降、結末に至るまでポイソヤウンマツの存在はまったく語られない。

一方で、結婚を主題とするユカラでは、前述のような戦いをつないでいくサイクルによる二段以上の構成はほとんど見られない。これは、ヒロインが複数にならないために、複数の戦い（＝複数の段）を避けているということが、ひとつには考えられる。

そして戦いを中心とするユカラでは、前述のように、結末は戦いの終了あるいは非戦闘状態を端的に表すものであった。一方で、そこで語られる「平穏な暮らし」の様子そのものは必須の要素ではなく、しばしば省略されている。しかし「イモンカオヤンマツ」においては、結末で語られている主人公の結婚こそが、この物語の主軸となるテーマであるため、これを省略することはできない。また、同様に結末で語られているトリカブ

トの由来も、このストーリーにおける不可欠な要素となっており、こちらもこのユカラのストーリー展開上、省くことができないモチーフである。

したがって、「イモンカオヤンマツ」の結末は、そこで語られている各モチーフがストーリーに直接かわつてくるために、入れ替え・省略が起こらず、結果として二つのテキストの結末における異同が小さくなっていると考えられる。

七. むすび

鍋沢元蔵氏のユカラにおける結末での典型的なパターンは、「山城で平穏な暮らしを送る」というものだが、そればかりではなく複数のパターンの結末があった。

しかし、それら複数の結末パターンの間に、ストーリー上の有意な差があるわけではない。それらはすべて「平穏な暮らし」（＝非戦闘状態）への回帰という点では同じだからである。結末における描写の多寡が見られるのも、このためであり、結末においては「平穏な暮らし」（＝非戦闘状態）を示せばよく、それ以外のモチーフはオブシヨナルな要素だと考えられる。

そしてこれは、戦闘を中心とするユカラが「平穏な暮らし↓戦闘↓平穏な暮らし……」というサイクルを成していることによる特徴だと考えられる。しばしば、次の敵や戦いが示唆されるという「開かれた」結末も見られるが、これは戦いと「平穏

「な暮らし」が交互にくり返されるため、「平穏な暮らし」（非戦闘状態）は戦いの終了と同時に、次なる戦いの始まりという位置づけにもなっているためである。

しかし、すべてのユカラにおいて結末が重視されないというわけでもない。結婚が物語の主題となっているユカラもあり、その場合は結末の揺れがほとんど見られない。こうしたユカラにおいては、結末は単なる「非戦闘状態」を表すのではなく、ストーリーの重要な一要素となっていると言えるだろう。

テキスト・参考文献

アイヌ文化振興・研究推進機構『アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告 第三号』二〇〇四

ウンベルト・エーコ（著）、篠原資明・和田忠彦（訳）『開かれ
た作品』一九八四 青土社

ウンベルト・エーコ（著）、篠原資明（訳）『物語における読者』
一九九三 青土社

遠藤志保「アイヌ英雄叙事詩「ニタイパカイエ」の二種類のテ
キストに関する考察」『千葉大学 人文社会科学学研究所』二十七

二〇一三 千葉大学人文社会科学学研究所

奥田統己「アイヌの英雄叙事詩における英雄像の地域差」本田
優子（編）『伝承から探るアイヌの歴史』二〇一〇 札幌大
学附属総合研究所

金田一京助『金田一京助全集 第九卷 アイヌ文学Ⅲ』

一九九三a 三省堂

金田一京助『金田一京助全集 第十卷 アイヌ文学Ⅳ』
一九九三b 三省堂

仁平道明「へ開かれた結末へ閉じられた結末への二元論をこ
えて」『国文学 解釈と鑑賞』第七五巻九号 二〇一〇 至
文堂

蓮池悦子「伝承と伝承者——金成マツ」『岩波講座 日本文学
史 第十七巻』一九九七 岩波書店

廣野由美子『批評理論入門「フランケンシュタイン」解剖講
義』二〇〇五 中公新書

北海道ウタリ協会（編）『アコロイタク アイヌ語テキスト一』
一九九四 クルーズ

北海道教育庁社会教育部文化課（編）『久保寺逸彦ノート』
一九八七・一九九一

本田優子「アイヌ口承文芸にあらわれる衣服について」『北海
道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』十二〇〇四

本田優子「英雄叙事詩と散文説話」本田優子（編）『伝承から
探るアイヌの歴史』二〇一〇 札幌大学附属総合研究所

門別町郷土史研究会（編）『アイヌ叙事詩 クトネシリカ』『鍋
沢元蔵（筆録）、扇谷昌康（訳注）』一九六五 門別町郷土史
研究会

門別町郷土史研究会（編）『アイヌの叙事詩』『鍋沢元蔵（筆
録）、扇谷昌康（訳注）』一九六九 門別町郷土史研究会

門別町郷土史研究会（編）『アイヌの叙事詩』『鍋沢元蔵（筆
録）、扇谷昌康（訳注）』一九六九 門別町郷土史研究会

注

(1) アイヌの英雄叙事詩は、地域によってユカラ、サコロベ、ハウ、ハウキなど名称が異なるが、本論では沙流地方の英雄叙事詩（ユカラ）のみを取り上げているため、ユカラという呼称を用いる。

(2) 「ポインソヤウンマツ」は昭和三十四年筆録ノートに所収。鍋沢氏によるタイトルは「ポインソヤンマツ イワンロククンテウ ウコエタイエ」だが、本稿では略して「ポインヤウンマツ」と記す。「三兄弟」は昭和三年筆録ノートに所収。タイトルを鍋沢氏は書いていないため、筆者が便宜的につけた。

(3) このほか、鍋沢菊市氏による「クトウネシリカ」も公刊されている（アイヌ文化振興・研究推進機構 二〇〇四）が、プロットの途中までの筆録となっているとのことだから、本稿では取り上げなかった。

(4) 両テキストのプロット比較については遠藤（二〇一三）参照。

(5) 本文では構造を単純化するため、戦いの数Ⅱ段数としているが、ストーリーの流れがつかっているときは、ひとつの戦いが終わっても山城に戻ることなく、「倒れ木に腰かけて」考えごとをしたり、傷を癒したりするという場面で戦いの終了を示した後、すぐさま次の戦いに赴く。

この場合は、ひとつの段のなかで複数の戦いが語られていることになる。

(6) 主人公・イモンカオヤンマツの結婚相手はそれぞれオキクルミ（三十三年版）とアイヌラツクル（四十年版）という異なる名称の人物となっているが、他のテキストも参考になると鍋沢氏はオキクルミとアイヌラツクルとを同一視していると考えられる。

(7) 鍋沢氏による筆録ノートではカナ書きによるアイヌ語のため、訳は筆者による。また、アイヌ語表記については鍋沢氏特有の表記法も見られることから、便宜のために、北海道ウタリ協会編（一九九四）における表記に改めた。

（えんどう・しほ／千葉大学大学院）

（付記）本稿で使用したテキストの一部には、国立民族学博物館ならびに北海道大学アイヌ・先住民研究センター所蔵の鍋沢元蔵氏筆録ノートを使用した。両機関には貴重な資料を見せていただいたことを感謝し上げる。